

---

# Fate/stay night ~ その時聖杯に願うこと

石・丸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

F a t e / s t a y   n i g h t   〉   その時聖杯に願うこと

### 【Nコード】

N 3 4 9 2 B A

### 【作者名】

石・丸

### 【あらすじ】

全てを終え眠りについたセイバー。しかし運命の悪戯か、目覚めた彼女の前に衛宮士郎の姿が。

いつか見た光景に戸惑いながらも、彼女は彼に問いかける。

『                    問おう。貴方が、私のマスターか』と。

聖杯戦争再構成。セイバー逆行もの。

( a r c a d i a 様に投稿した作品の加筆、修正 v e r になります )

## 第一話

### 第一話

「ちよいとばかり驚かさねましたが、もしかしたら、お前が最後のマスターだったのかもな？」

「……マスター？」

薄く靄がかかったような思考の中に声が響く。しかし、そんなものに頓着している暇など私にはない。

何故なら、今まさに彼は“敵”に命を奪われようとしているからだ。

翻る真紅の槍。その切っ先は、真っ直ぐに彼の心臓へと向いている。

逡巡する間などありはしない。私は魔法陣から出るや、彼へと迫る閃光のような一撃を力の限り打ち弾いた。

瞬間、腕に伝わる激しい衝撃。

宝具通しのぶつかり合いは、目も眩むばかりの魔力の発光を促し、その光で薄暗い土蔵が明るくなった。

「本気が、七人目のサーヴァントだと……!?」

態勢を整えている暇はない。私はそのまま流れるように踏み込むと、槍を構えた男へ叩き付けるような一撃を放った。

槍を構えた男　ランサーは、手にした槍の腹で一撃を捌くも、衝撃に押され僅かに態勢を崩す。

「チッ　！」

軽く舌打ちをしながら、ランサーが後退する。

それは神速の如き素早さで、ランサーは私が一息も吐かないうちに土蔵の外へと身を躍らせていた。

しかし、これで彼の命を救うという当初の目的は達せられた。

私は油断なく外のランサーを牽制しながら、ゆっくりと背後にいたであろう人物を振り返った。

覚えている。

とても風の強い日だった。

あの日と同じ月明かりが、まるで銀光のように土蔵へと射し込み、私と目の前で尻餅を付いている少年を照らしている。

「  
」

彼は驚いたように呆けながら、声も無く私を見上げていた。

赤茶けた短髪。男性としては低い身の丈。だけど決して華奢ではない。日々の鍛錬の賜物なのだろう。全身あますところなく鍛えられていて逞しい。

私はその力強さを知っている。

彼のやさしさ、暖かい温もりも知っている。そして、余人では背負いきれないだろう彼の理想も。

思えば無茶ばかりしていた。いつも傷ついて、それでも決して倒れなかった。理想の重さに潰されそうになりながらも、走りつづけた。

そんな彼を、いつしか愛おしいと思うようになって

声を荒げて喧嘩をしたこともある。

互い互いを想い、それでも曲げることの出来ない思いからぶつか

ったのだ。あの夕焼けた世界の中で彼の在り方を罵倒し、そんな私に対して彼はもう知らないとはかりに走り去って行く。

薄く滲んだ視界の中で、だんだんと小さくなっていく彼の背中。遠くにいくにつれて心に広がった小さな波紋。

辛かった。心が痛かった。

けれど、彼も辛かったに違いない。心が痛かったに違いない。それでも彼は私を迎えに来てくれたのだ。

あの時の手の温もりを、私は忘れることはないだろう。

「

シロウト、そう呼んだら彼はどんな顔をするのだろうか？

言葉もなく、ただ私を見上げている彼。

やはり驚くだろうか。

けれど、今、私が言うべき言葉は決まっていた。私は、言葉に万感の想いを乗せて

「 問おう。貴方が、私のマスターか」

そっと、それだけを口にした。

「え……マス……ター……？」

彼はオウム返しに問われた言葉を口にす。

私が何者なのか、今現在何が起こっているのかが判らずに、混乱をきたしているのだろう。

でも私は知っている。貴方が何者なのかを。

「サーヴァント・セイバー。召喚に従い参上した。マスター、指示を」

私の声を耳にした瞬間、彼が左手の甲を押さえながら苦痛に顔を歪める。

そう“令呪”が現れたのだ。

サーヴァントとマスター。

令呪が異なつた存在である私達を繋ぐ。私にとって唯一のマスターである貴方と。

「これより我が剣は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にある

ここに、契約は完了した」

「け、契約つて、なんのっ!？」

今は説明している時間はない。外にはランサーが控えているのだ。私は彼に背を向けるや魔力を脚に乗せ、土蔵の外へと身を躍らせた。

「やめっ  
「!」

やめる。そう言おうとしたのだろう。その彼の声を背中に受けながら、出会いがしらにランサーへ聖剣を叩き付ける。

土蔵から飛び出た瞬間、待ち構えていたランサーとぶつかったのだ。

互いの宝具が相手を仕留めるべく翻る。私は振るう一撃に魔力を込め、爆発させた。

ランサーと私にはかなりの体格差があるが、そんなものは溢れる

魔力で埋めてみせる。

「はあっツ!!」

上段から袈裟斬りに振り下ろす。その一撃を槍の腹で受け止めたものの、魔力爆散の影響でランサーが後退した。

間合いが開く　だが、攻撃の手を緩めるわけにはいかない。

私は彼の後を追撃するや、縦横無尽、連撃を火のように加えていく。それらの一撃をランサーが受ける度に、激しい剣戟の音と併せて火花のような閃光が散った。

「ぐっ……卑怯者め。自らの武器を隠すとは何事か　!!」

苦虫を嚙潰したような表情でランサーが悪態を吐く。

さしものランサーも、この武器相手ではやりにくいとみえる。

何せ私の持つ剣は相手の視界に映らない。文字通り見えないのだから。

ならば、押し込む。

聖剣を下段に構えたまま肩から突進し、迫る紅撃を打ち上げた。そして、返す刃で空いた空間に一撃を放つ。

「てめえ……!!」

ランサーが更に後退するのに合わせ更に押し込んでいく。

激しく散る魔力の飛沫に合わせて剣舞のように続く連撃。それでもランサーは私の全ての攻撃を防ぎきっていた。

初見で、しかも見えない武器相手だというのによくやるものだと感心する。

だが防御に徹して防ぎきれぬほど私の攻撃は甘くない。  
彼が守るなら、その守りごとと撃ち砕く。

私は渾身の力を両腕に込めて、相手のガードごと打ち砕くべく聖  
剣を振り上げた。

だが……

「調子に乗るな、たわけッッ！」

聖剣を振り下ろすのと同時に、視界からランサーが消え失せる。

「ち……！」

見失った敵の気配を直感を頼りに探り当てる。

彼は一旦後方へと飛び退り、着地と同時に弾けるようにして舞い  
戻って来ていた。

しかし、相手の行動が読めても私の体勢は崩れたままだ。振り下  
ろした聖剣は未だ地面を撃ち据えたままであり、敵であるランサー  
が眼前に迫っている。

ここが勝機とばかりに、必殺の一撃を繰り出すランサー。

しかし、私とてセイバーの名を冠するサーヴァントだ。

迫る一撃を円を描くようにして避けると、そのまま相手の脇腹に  
向かって聖剣を走らせて

「ぐう　　ッ！！」

「ぬう　　っ！！」

激しい衝撃が両腕から全身へと伝わっていく。

渾身の一撃は互いの武器を打つに留まったようだ。そして、その  
勢いで私とランサーの間合いが大きく開く。

一瞬の静寂。

離れた間合いの中でランサーは槍を構え、じつと私を睨み据えていた。

「どうした、ランサー？ 止まっただけで槍兵の名が泣こう。それとも私から行った方がいいかな」

「ハッ！ わざわざ死にに来るか。それは構わんが、その前に一つだけ訊かせろ。貴様の宝具 それは剣か？」

ランサーを射抜くように見つめる。

あの時と“同じ”問い。ならば此度の私の答えも決まっている。

「さあ、どうかな。戦斧かも知れぬし槍剣かも知れぬ。いや、もしかしたら弓かも知れんぞ、ランサー？」

私の答えを受けて、ランサーは面白そうに口端を歪め

「はっ。ぬかせ、剣使い」

と言い放った。

次いでランサーは、僅かに槍の穂先を下げ、もう一度だけ口を開く。

「……ついでにもう一つ訊くが、お互い初見だしよ、ここらで分けて気はないか？」

私を視界に納めたまま、ランサーが私の後方へと気配を向ける。

そこには、いつの間に土蔵から出てきたのか、私のマスターたる彼が呆然と佇んでいた。

「悪い話じゃないだろ？ ほら、あそこで惚けているお前のマス

ターは使い物にならんし、俺のマスターとて臆病者でね。イレギュラーな事態が起きたなら帰って来いとぬかしやがる。ここはお互い万全の状態になるまで勝負を持ち越した方が好ましいんだが……」

月明かりを全身に浴びながら、ランサーが私の答えを待っている。その間に私は、視線だけを動かして自身のマスターを捉えた。

彼は心配そうに私のことを見つめている。

先程まで自身が殺されかけていたにもかかわらず、私のことを案じているのだ。

本当に彼らしい。

私はほつつと小さく息を吐いてから、改めてランサーに視線を戻した。

「良いだろう、ランサー。その提案を受けることにする。今宵はここまでとしよう」

「ほう、以外に融通が利くじゃねえか。セイバーなんてどいつも堅物だと思っていたが。いや、助かったぜ」

先に私が剣を下げたのを見届けてからランサーも槍を下げた。と思ったのも束の間、僅か一足で広い衛宮の庭の隅まで移動する。

「じゃあな。次に会う時を楽しみにしてるぜ、セイバー」

それが最後の言葉。

青き槍兵は、身軽に塀を乗り越えて夜の闇に消えて行った。

ランサーを見送ってから聖剣の存在を掌から消す。それを待っていたかのようなタイミングで、背後から駆け寄ってくる乱雑な足音

が耳に届いた。

「　　なんで」

足音は私の側で止まる。

それを確認してから、私はゆっくりと己がマスターを視界に納める為に振り返った。

シロウ。

彼は私に声をかけようとして口を開こうとするが、まだ混乱しているのか、言葉を出さずに閉じる。そんな行為を繰り返していた。

……ああ。これは奇跡なのだろうか。

私の目の前に彼が、シロウがいる。

あの激闘の後、確かに別れた私の半身。もう会えないと、せめて夢の中でならと眠りについたはずなのに……彼が、今まさに私の目の前にいるのだ。

思わず彼に手を伸ばしてしまふ。それにあわせて身に纏った鎧が軽い金属音を奏でた。

その音に驚いたのだろうか、彼が半歩だけ後ろに下がる。

いけない。

私は何をしているんだ？　こんなことをしてもただ単に彼を驚かせるだけなのに……。

そう思ったものの、一度動き出した想いは止まらなかった。

駄目だ、やめろ　！

心の声に反して身体が動く。

半歩下がった彼に離されないように、一歩だけ近づいた。今度は彼も動かない。

そして、視線が逢った。

掌が彼の頬を抱くように伸びて 気がついてみれば、私は彼をきつく抱き締めていた。ゆっくりと伸ばされた腕が彼の背中へと廻っている。

ああ、シロウが私の腕の中にいる。

シロウが、シロウが、シロウが 私の腕の中にいるのだ。

それは永遠とも思える時間。私は月光をその身に浴びながら、彼の胸に顔を埋めその温もりを感じていた。

音の無い静寂の中。密着した身体から彼の動きが伝わってくる。

もしかしたら、私は震えていたのかもしれない。彼はそっと私の肩に手を置いてから、落ち着いた声で

「　　なんで、泣いてる？」

はっと、彼を見上げた。間近で視線が絡み合う。

そして気付く。頬を伝う熱さに。

私は……泣いているのか？

これじゃいけないと、私は慌てて彼から腕を離し背中を向けた。

それから右腕で目元を覆ってから、改めて彼に向き直る。

今度は強く自分を律しながら。

その行為で場に緊張感が戻ってきた。彼は私の変化に戸惑いながらも疑問を口にする。

「おまえ……何者だ？」

「何者もなにも、セイバーのサーヴァントです。シ……貴方が私を呼び出したのですから、確認するまでもないでしょう」

「セイバーの……サーヴァント……？」

何を考えているのだろう。彼の目が驚きに見開かれている。

「はい。ですから、私の事はセイバーと」

そう、呼んでください。

「そ、そうか。セイバーだなんてヘンな名前だな……」

彼はそわそわと地面に視線を落としたり、私を横目で盗み見たりしながら、最後にぶつきらぼうにこう付け加える。

「お、俺は士郎。衛宮士郎っていつてこの家の人間だ」

シロウ。そう、貴方の名前はエミヤシロウ。魂にまで刻まれている、永遠に忘れ得ぬ愛する人の名前。

だが、じっと見つめる私の視線を勘違いしたのか、彼が慌てたように両手を振った。

「いや、違う。今のはナシだ。訊きたいことはそういう事でなくてだな、つまり……」

「知っています。貴方は正規のマスターではないのでしょうか？」

「え……？」

「しかし、それでも貴方は私のマスターです。契約を交わした以上貴方を裏切りはしない。そのように警戒する必要はありません」

「い、今……なん……て？ マスター？」

話にまったく付いていけてないのだろう。シロウが口籠もっているのが分かる。

けれど無理もない。命を狙われて、死にそうになって、窮地を助けてくれたとはいえ私は見も知らない不審者なのだ。すんなりと事態を受け入れる方がおかしい。

「ち、違うぞ。俺マスターなんて名前じゃない」

「それでは、シロウと。ええ、私としてはこの発音の方が好ましい」「なっ………っ！！」

彼の顔が赤くなっただのが分かった。

名前を呼ばれたのが恥ずかしかったのだろうか。何だか、そういう仕草は見ていて微笑ましく思える。

「ちょっと待ってっ！ 何だってそっちの方を………て、痛っなんだ、これ。あ、熱くなっ………！」

信じられない物を見つけたとばかりに、シロウが左手の甲を凝視している。

確認しなくても分かる。そこには刺青のような紋様が刻まれているはずだ。

「それは令呪と呼ばれるものです。私達サーヴァントを律する三つの命令権でありマスターとしての命でもある。無闇な使用は避けてください、シロウ」

「セ、セイバー？」

「シロウ。外に………」

一瞬、口籠もる。

敵　そう、今は“まだ敵”のはずだ。

「外に敵が二人います。この程度の重圧ならば問題ない相手ですが、放っておく訳にはいかないでしょう」

「……外に敵だって？　ちょっと待て。おまえまだ戦うつていうのか！？」

「向かってくるのなら応戦はします。とりあえず外に出ませんか、シロウ」

こうして私は、想像すらしていなかった、自身三度目となる聖杯戦争に身を投じることになったのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3492ba/>

---

Fate/stay night ~ その時聖杯に願うこと

2012年1月9日00時50分発行